

[論文]

保育実践の場における「領域」の 総合的な理解に関する研究

江津和也^{*1}幸喜健^{*2}吉濱優子^{*3}

要旨

幼稚園や保育所等の実践の場において保育内容の5領域が保育者にどのようなものとして理解されているか質問紙調査をおこなった。これにより5領域それぞれの内容について保育者の理解には偏りがあったり、日々行なっている自らの実践と結び付けられていない実態が明らかになった。調査後には、この結果をふまえて神奈川県横浜市S保育所では園長主宰で保育所保育指針における保育内容に関する園内研修がおこなわれた。この研修を通じ、保育者の5領域に対する理解がどのように変化し、どのような効果があったのか、研修前後の保育者の意識について分析したところ、園内研修を通じて、5領域の考え方についての理解が深まるとともに、具体的に5領域から子どもの育ちを捉える視点を自らの保育に取り入れようとした保育者が多く見られるなど、意識するだけでなく実践につながっていくことが明らかになった。

Key words：保育内容の5領域，保育所保育指針，園内研修

はじめに

本論は、幼稚園や保育所等の保育実践の場において保育所保育指針や幼稚園教育要領等（以下、保育指針等）に示される保育内容「5領域」が保育者にどのように意識され、それが実際どのように日々の保育に生かされているか明らかしようとする研究の一環として、保育所における保育内容5領域に関わる園内研修を通じて、保育者のそれらへの意識がどのように変化したか、また保育内容を総合的に理解するための園内研修のあり方について考察しようとするものである。

保育者が保育指針等に示された保育内容の5領域のねらいと内容をふまえて指導計画を立て、保育をおこない、さらにはそれにもとづき保育の振り返りをおこなうことは、子どもに望ましい経験を提供し、それを通して総合的に育てる観点から必要なことである。特に平成29（2017）年3月改訂

※1 淑徳大学総合福祉学部准教授

※2 東京福祉大学社会福祉学部専任講師

※3 白梅いずみ保育園園長

の保育指針では、保育所が幼児教育をになう機関として明確に位置づけられた。このように学校教育につながる3つの資質・能力を育てていく観点からも5領域を正しく理解することは重要である。

しかし、筆者らが保育所、幼稚園および認定こども園の保育者を対象におこなった調査研究¹⁾において、①指導計画の立案や保育記録の記入の際に5領域が保育者に意識されるにとどまり、5領域が日々の保育の振り返りにまで必ずしも生かされていないこと、また②意識される各領域の保育の内容が、保育者それぞれのもつ各領域に対するイメージに左右され、偏りがみられるなど、必ずしも保育内容の5領域が保育者に十分に理解されていないことが明らかになった。

神奈川県横浜市S保育所では、新保育指針等の実施に向けて、保育の現場において保育指針等における保育内容5領域が正しく理解され、実践に生かされることが重要との観点から、保育指針等における5領域に関する理解を深めるための園内研修を園長主宰で実施した。

園内研修は以下の流れで実施された。①先にあげた調査研究の結果を園長があらためて保育士等に対して報告をおこない、5領域の視点が保育の振り返り等に必ずしも生かされていない実態について指摘した。次に②各領域やそれらが総合的に展開されることなど、保育指針等に示される保育内容の基本についての講義をおこなった。また③保育指針および同解説書等を保育士に日常参照できるような体制を整え、読み合わせをおこなうようにした。

本論においては、保育現場における保育内容の5領域に対する理解について考察するとともに、こうした園内研修を通じて保育者の5領域に対する理解がどのように変化し、どのような効果があったのか、研修前後の保育者の意識を分析することにより明らかにし、正しい5領域の理解につながるような研修のあり方を考える一助にしたいと考えた。

I 研究の方法

1. 調査対象

神奈川県横浜市のS保育所勤務の保育士等（延べ41名）に質問紙調査をおこなった。属性は以下の通りである。

(1) 研修実施前

15名（内訳：園長1名、主任2名、保育士11名、保育補助1名）

(2) 研修実施後

26名（内訳：園長1名、主任2名、保育士10名、保育補助7名、調理員・栄養士4名、事務員2名）

2. 調査期間

研修実施前 2015年12月中旬

研修実施後 2016年12月下旬

3. 調査内容

(1) 研修実施前

- ① 5 領域をどのような機会に意識するか
- ② 各領域のねらいをどの程度意識するか
- ③ ねらいを達成するための具体的な取り組み

(2) 研修実施後

上記①～③に加え、

- ④ 園内研修において学んだこと
- ⑤ 調査実施や園内研修を受けて役立ったこと

4. 分析方法

質問紙の集計をおこない研修前後において保育者の意識がどのように変化したのか分析した。また、自由記述の分析に際してはテキストマイニングの手法²⁾を用い、保育者を含めた3名で分析結果について検討した。

5. 倫理的配慮

質問紙調査への協力は任意であり、記述内容等についてもいっさい不利益がないことを確認し、同意者のみ回答を求めた。

II 結果と考察

1. 研修後の保育者の意識の変化

(1) 「5 領域」に対する意識

「どういった機会に5 領域を意識するのか」との質問（複数選択可、選択肢は以下の1 から6 の各項目）に対して、研修実施前と実施後とで【図1】、【図2】のような結果が得られた。いずれも回答の得られた者のうち、保育に携わる者（園長、主任、保育士、保育補助）のみについて集計した。

- 1. 園内外の研修の際に意識している
- 2. 要録等の個人記録を作成する際に意識している
- 3. 週案や月案といった指導計画案を作成する際に意識している
- 4. 1日の終わりに保育を振り返る際や翌日の保育を構想する際に意識している
- 5. 子どもとかかわる際は常に意識している
- 6. その他

各項目微増もしくは微減という結果が得られたが、二番目の項目「要録等の個人記録を作成す

る際に意識している」については、選択する者が60%から30%と減少の割合が他の項目と比べて大きくなっている。これは、子どもの育ちの「結果」ではなく、研修実施後には、日々の子どもの育ちの「プロセス」を捉える視点として5領域が意識されるようになってきた表れではないかと考えられる。

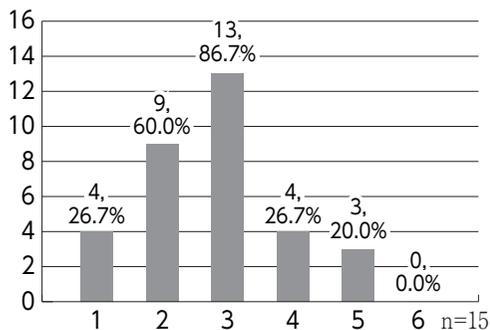


図1 研修実施前の5領域を意識する機会

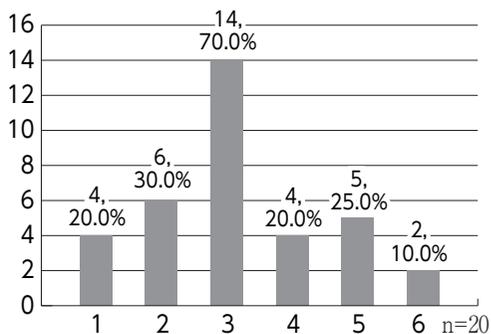


図2 研修実施後の5領域を意識する機会

(2) 各「領域」に対する意識

「各領域のねらいをどの程度意識して保育実践に臨んでいるのか」という質問（各領域の「ねらい」について、最もあてはまると思われるものを以下の1から5の選択肢からひとつ選ぶ）に対して、研修実施前後において、【図3】～【図7】のような結果が得られた。いずれも回答の得られた者のうち、保育に携わる者（園長、主任、保育士、保育補助）のみを集計し、その割合で示した。これらの結果については後ほど自由記述の分析と併せ、特に各項目において研修実施後に選択する者の割合が増えたもの（さらに意識されるようになったと思われる部分）を取り上げて考察する。

5. 子どもとかわる際は常に意識するレベル
4. 1日の終わりに保育を振り返る際や翌日の保育を構想する際に意識するレベル
3. 週案や月案といった指導計画案を作成する際に意識するレベル
2. 要録等の個人記録を作成する際に意識するレベル
1. 園内外の研修の際に意識するレベル

<健康>

- ①明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう
- ②自分の身体を十分に動かし、進んで運動しようとする
- ③健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける

<人間関係>

- ①保育所生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう

- ②身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感を持つ
- ③社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける

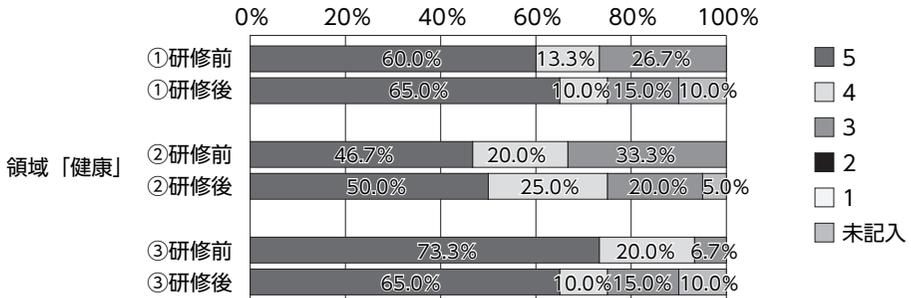


図3 研修前後での領域「健康」に対する意識の変化

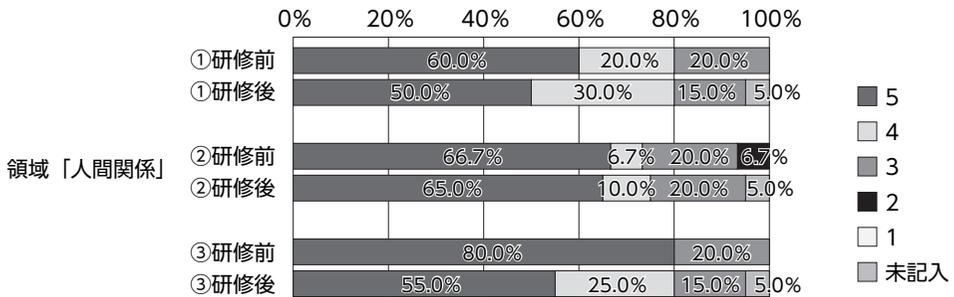


図4 研修前後での領域「人間関係」に対する意識の変化

<環境>

- ①身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ
- ②身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする
- ③身近な事物を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする

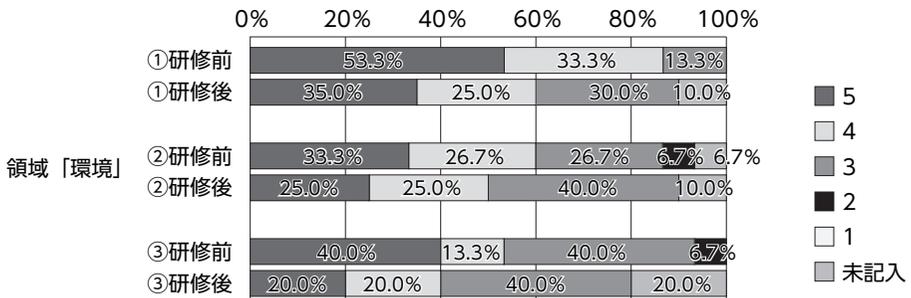


図5 研修前後での領域「環境」に対する意識の変化

<言葉>

- ①自分の気持ちや言葉で表現する楽しさを味わう
- ②人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう
- ③日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、保育士等や友達と心を通わせる

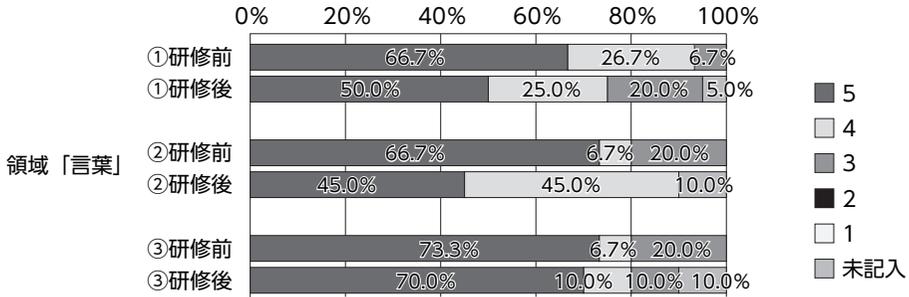


図6 研修前後での領域「言葉」に対する意識の変化

<表現>

- ①いろいろな物の美しさなどに対する豊かな感性を持つ
- ②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ
- ③生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ

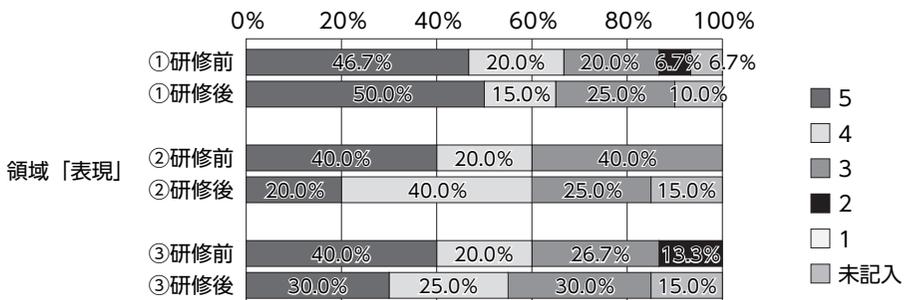


図7 研修前後での領域「表現」に対する意識の変化

2. 園内研修後における保育の取り組みについての変化

「各領域のねらいを達成するための具体的な取り組み」について、自由記述で回答を得た。その自由記述中に出現した単語間の共起関係を抽出する共起ネットワーク分析をおこない、研修前と研修後における取り組みを図式化したところ、【図8】～【図17】のようになった。

(1) 健康

【図8】、【図9】中の円で示した部分のように、子どもの生活習慣の形成に関する取り組みの

記述が増えていることが窺える。(自由記述の具体例「健康に過ごす為に必要な習慣は毎日の保育の中に取り入れ、身に付けられるようリズムを整える」「手洗い、うがい、排泄等、毎日の生活の中でくり返し伝えていく」)

先にみたように「健康」において、ねらい③(健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける)の「週案や月案といった指導計画案を作成する際に意識するレベル」を選ぶ者の割合が、研修実施後に6.7%から15%へと約2倍に増加しているが、これは計画に基づき日々の保育の中で子どもの生活習慣の形成を援助するような取り組みが意識されるようになってきたことの表れであると考えられる。

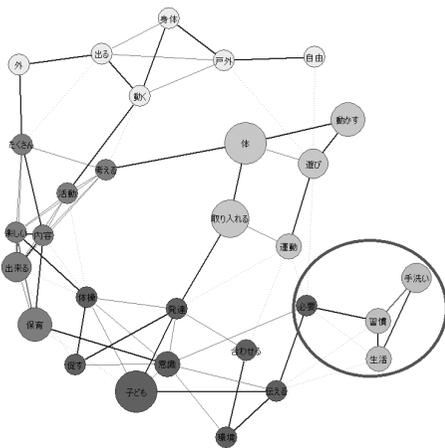


図8 研修実施前における領域「健康」についての具体的取り組み

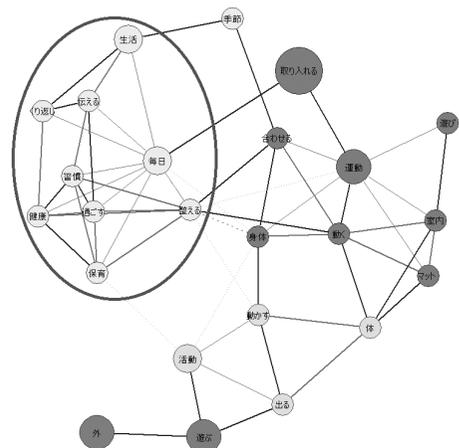


図9 研修実施後における領域「健康」についての具体的取り組み

(2) 人間関係

【図10】、【図11】中の円で示した部分のように、社会生活における習慣(ルールやマナー、ふさわしい振る舞いなど)の形成に関する記述が増えていることが窺える。また、【図11】の円Aで示した園内での集団生活におけるルールに加え、円Bで示した部分のように地域社会とのつながりから人と関わる際のマナーを身に付けるような記述も見られるようになり、より幅広い人間関係を意識した取り組みが増えていることが窺われる。(自由記述の具体例「月齢に応じて、やってはいけないことはその都度教え、良いことはほめるなど集団の中でのルールの基本となることを少しずつ伝えている」「散歩中など、地域の方々とも気持ち良く挨拶を交わし、挨拶やマナーを伝えていく」「園外に出た時に挨拶をするよう促す声かけをする」)

領域「人間関係」において、ねらい③(社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける)の「1日の終わりに保育を振り返る際や翌日の保育を構想する際に意識するレベル」を選ぶ者が研修実施前はいなかったのに対して、研修実施後25%へと4分の1の者が選択するようになっている。これは上記の取り組みに見られるように、子どもの人間関係を育むうえで園内という閉じ

(自由記述の具体例「砂・氷・雪・小麦粉・土など様々な感触あそびを取り入れ、体験を通して自ら学ぶことを大切に」「自分たちの日常での経験や発見をごっこあそびなどで展開している。展開できる環境をつくれる場をもうける」)

このことは領域「環境」において、ねらい①(身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ)及びねらい②(身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする)の各項目において、「週案や月案といった指導計画案を作成する際に意識するレベル」を選ぶ者の割合が、研修実施後にねらい①では13.3%が30%に、ねらい②では26.7%が40%にそれぞれ増加していることから示唆される。

(4) 言葉

領域「言葉」において、ねらい①(自分の気持ちや言葉で表現する楽しさを味わう)の「週案や月案といった指導計画案を作成する際に意識するレベル」を選択する者の割合が6.7%から20%へ増加が見られた。意識的に計画立案時から子どもが自分の気持ちを発表する機会を設けるようになってきたことと表れ、この取り組みは自由記述からも窺える。(自由記述の具体例「クラス全体で1人ずつ発表する時間(行動の中での感想など)を作る」「人前でも自分の気持ちを言えるように、発表の場や機会を設ける」)

また、ねらい②(人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう)の「1日の終わりに保育を振り返る際や翌日の保育を構想する際に意識するレベル」を選択する者の割合が6.7%から45%に約7倍の増加が見られた。このことは保育者が子どもとの言葉のやりとりをしっかりと振り返り、そこから子どもの育ちを捉えようとする表れではないか。自由記述においても研修実施前に見られた「代弁」という言葉が見られなくなり、じっくりと子どもと向き合い、子どもが相手に言葉を伝えることや言葉のやりとりを満足できる

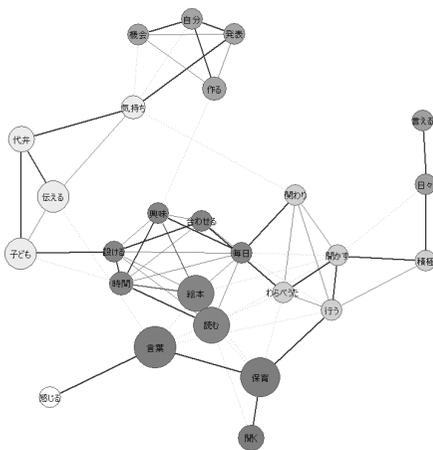


図14 研修実施前における領域「言葉」についての具体的な取り組み

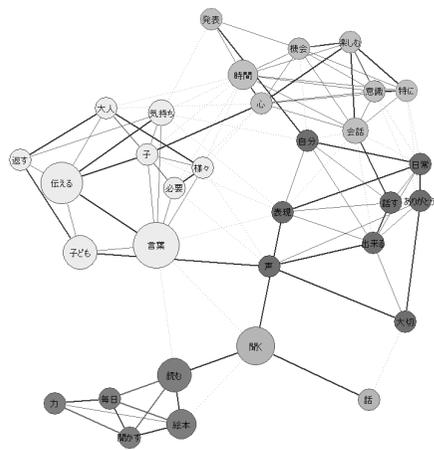


図15 研修実施後における領域「言葉」についての具体的な取り組み

ように取り組む様子が見受けられた。領域「言葉」における子どもの育ちを意識し、子どもなりの言葉や伝え方を尊重するようになったのではないかと考えられる。（自由記述の具体例「喃語の時期からも、子どもが伝えようとしている気持ちを汲み取り、言葉にして返してあげ、伝わることの安心感や喜びを味わえるようにする」「まだ言葉がうまく伝えられなかったり、表現することが難しい子であっても、伝えようとする気持ちを大事に受け止め、満足するまで十分聞いてあげたり理解しようと努める」「子どもの話をさげざげに最後までしっかりと聞く」「会話を楽しむ機会をもうけることを意識している。給食の時間は特に心なごむような時間で、会話を楽しみながらを心がけている」）

(5) 表現

領域「表現」において、ねらい②（感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ）の「1日の終わりに保育を振り返る際や翌日の保育を構想する際に意識するレベル」を選択する者の割合が20%から40%へと倍増している。子どもの感性を大切にそれを表現できるような環境を設定し、日々の保育が深まりながら展開されていくようになってきたことの表れであると考えられ、この取り組みは自由記述からも窺える。（自由記述の具体例「ごっこあそびなど更に広がるために様々な素材や用具などを準備する」「ごっこあそびでは、子どもたちの経験していることがあそびにつながるような手助け、準備などし遊びを発展させていくようにしている」）

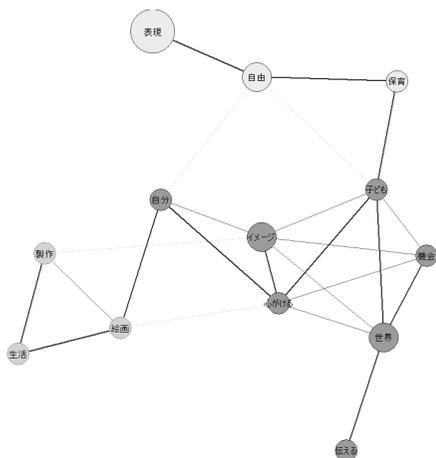


図16 研修実施前における領域「表現」についての具体的な取り組み

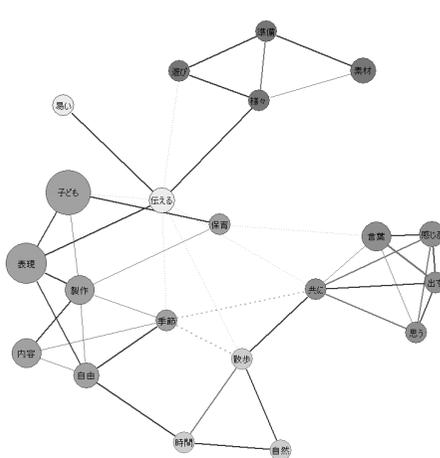


図17 研修実施後における領域「表現」についての具体的な取り組み

以上のように、研修実施前後で各領域における取り組みに関する記述の変化が見られたが、これらは子どもの育ちを援助するために自分たちが今まであたり前のようにしてきたことを改めて「5領域」の枠組みを通して見直すことで、より意図的に保育を展開できるようになってきたことの表れではないかと考えられる。このように「5領域」が発達を捉える視点、そして自らの援助を図るうえでの手掛かりとして保育実践の場において機能していることが理解できる。

3. 園内研修を通じた領域への意識の変化

(1) 園内研修において学んだこと

各「領域」ごとに、ねらいと内容について保育者等がどのように意識され、それが研修後にもどのように変化してきたのか分析してきた。本節では保育指針等における保育内容にかかわる園内研修を通じて保育内容全体に関する保育者の意識がどのように変化してきたのか、自由記述をもとに考察することとしたい。まず「園内研修において学んだこと」という質問について検討する。

たとえば、「園内研修を受け、再度5領域について考えていかなければいけないと思った。再確認することが出来た」、「正直、5領域を意識することは薄れていました。改めて思いおこした次第です。(スママセン)ただ、長年に渡り、乳児担当だった為、考えることはなかったです。乳児にとって…を考え直すきっかけをもらいました」などの記述があった。保育士養成施設における保育内容総論等において学んで以来、あまり意識することはなく実践していたことが吐露されているが、園内研修を通じて保育内容の5領域の視点の重要性を再確認することができたことが窺える。

また、「5領域を常に意識した事がなく、内容もあまりわかっていませんでした。このアンケートや前回の研修の時に、普段行っている事が、自然と5領域になっている事に気付く事ができました」、「“5領域”と深く考えず、子どもと接するとき自然にやっていたことが“5領域”だった。5領域の内容を再確認できた」との記述にみられるように、園内研修がきっかけとなり「領域」の視点が意識されるとともに、保育者が日々実践する保育とつながっていったことがわかる。

また、「質の高い保育をするために、保育士は研修などで学び、意識を高めることが大切だと感じた」、「他の先生方が、5領域をどのように意識して日頃の保育に取り組んでいるのかが分かり、客観的に自分の事を見直すことが出来た」との記述にみられるように研修や自己の保育を振り返ることの意義を再確認する者もみられた。

このように園内研修を通じて、保育者の保育内容の5領域についての理解が深まるとともに、具体的に5領域を自らの保育に取り入れようとする保育者が多く見られるなど、意識するだけでなく実践につながっていったといえよう。

(2) 園内研修を受けたことで保育実践をする上で役に立っていると思うこと

次に「園内研修を受けたことで保育実践をする上で役に立っていると思うこと」という問いに対する自由記述について検討する。たとえば、「具体的にねらいをもつことで、それを達成するための内容を考えるようになったかな…と思います」、「あたり前のようにすすめてきた保育の見直しや、実践している保育に自分たちの思っている以上のことがねらいとしてもり込まれていたことなどに気づかされた。5領域を意識しながら、子どもたちにとって本当に大切なことをこれからすすめていきたいという考え方ができるようになった。(5領域のみ意識するのではなく)」などの記述に見られるように、各領域のねらいと内容についてあらためて意識する機会となったとの記述が多く見られた。つまり保育者が子どもの育ちを考える視点として5領域の重要

性を再確認し、実践する上で常に意識していくことの必要を感じていったことが窺える。

また、「意識が変わった」、「今までの保育を改めて見直し、考えるよい機会になりました。自分の勉強不足な部分も多かったので反省しました。保育関係の本を読んだり研修などでさらに学んでいきたいと思います」などの記述に見られるように、園内研修が、保育者が高い意識をもって絶えず研修と自己研鑽を通じて自己を向上させていくことの重要性を再確認する場になったことも窺える。

おわりに

保育指針等における保育内容の5領域に関する園内研修によって、保育者の持つ各領域に対する理解が変化するとともに、5領域のねらいと内容とが再び実践の場において意識されることのきっかけになることが明らかになり、園長主宰による保育内容に関する研修の重要性が明らかになった。

平成29（2017）年3月改訂の保育所保育指針においては、3歳未満児の保育に関する保育内容について具体的に示されるとともに、3歳以上児においても幼稚園教育要領における保育内容との整合性が一層高まり、さらに初等教育との接続の観点から、幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿が示されるようになった。新保育指針が平成30（2018）年4月実施されるにあたって保育の質の向上をはかっていくためには、保育者が高い意識をもって新しい保育内容の考え方を理解していく必要がある。またそのための園内研修の在り方を検討していくことが望まれる。今後も、この観点にたって、子どもの総合的な育ちを考えた保育を目指すため、保育内容の理解につながる園内研修、養成の在り方について研究を進めていきたい。

【注】

- 1) 幸喜健・江津和也・茂木寿美子・吉濱優子「保育実践の場における『領域』理解に関する研究（1）」（日本保育学会第69回大会，東京学芸大学，2016年）。
- 2) 自由記述のデータをテキスト化し，KH Coder（Ver.2.00f, 2015）を使用して自由記述中に出現した単語間の共起関係（edge）を抽出する共起ネットワーク分析をおこなった。共起ネットワーク図の作成にあたっては，語の最小出現数を2として，それらの共起関係をJaccard係数0.2以上で描画をおこなった。分析と図の作成を進めるにあたっては次の文献を参考にした。樋口耕一「社会調査のための計量テキスト分析」ナカニシヤ出版，2014年。